下高井戸塚山遺跡

［指定年月日］平成一二年二月二二日
［種別］史跡（遺跡）
［名称］下高井戸塚山遺跡
［点数］
［所有者等］杉並区・関東財務局
［所在地等］下高井戸五―二三

史跡（遺跡）

下高井戸塚山遺跡

本遺跡は、神田川の蛇行によって形成された推定二万八〇〇〇㎡にも及ぶ舌状台地上（下高井戸五―二三一帯）に広がりを持つ、神田川流域では屈指の縄文時代中期の環状集落として知られている。

遺跡は大正末頃に区内在住かつ在野の研究家であった大里雄吉によって土器片や石斧が拾える場所として報告していたものである。

この塚山遺跡が一躍考古学界に知られるようになったのは、昭和一〇年（一九三五）の秋に江坂輝彌が竪穴住居址を発見したことに端を発し、翌一一年の江坂の発掘調査、一三年の明治大学の発掘調査によって縄文時代中期の集落であることが確信されたことにある。その後、さらに昭和四四年（一九六九）には一基、四八年（一九七三）には一〇基、同六一・六二年（一九八六・七）には三八基の計四九基の竪穴住居址が発掘調査並びに存在が確認されている。

このように本遺跡は縄文時代中期の環状集落として知られてきたが、昭和六一年（一九八六）の調査では区内旧石器時代では最古の文化層であるローム第Ⅹ層下部から局部磨製石斧も出土している。

現在、関東財務局所有部分を含む塚山遺跡の七〇～八〇％は公有地として杉並区が管理しており、これまでに調査された遺跡部分をそのまま遺すことを前提とした遺跡公園であることから、保存状態も良好であると言える。

【文化財所在地】